



SASURAI文学

# 夏の翼

井上勝夫



SASURAI文学



井上勝夫



- 一 落花流水編
- 二 天衣無縫編
- 三 一期一会編
- 四 相思相愛編

## **本を開くように、見開きページで読むことができます**

推奨：Adobe Reader（最新）

「表示」から「ページ表示」を選び、「見開きページ表示」を選択します。  
※モニターの光量は必要最低限にしてください。（ペーパーモード推奨）

## **液晶モニターで文字が読みにくいと感じた場合の調整方法**

Adobe Readerの「編集」で「環境設定」を選択します。

「分類」の「ページ表示」を項目選択して、「レンダリング」の

「テキストのスムージング」から「液晶画面用」を選択します。

「画像のスムージング」等の項目にも、チェックを入れた状態にします。

## **紙に印刷できます**

Adobe Readerの「印刷」をクリックして、ウインドウを開きます。

「プリンター」の種類を指定し、「印刷するページ」で「ページ指定」にチェックを入れて、「2-1041」と数値を指定してください。

「ページサイズ処理」で「複数」をクリックし、「1枚当たりのページ数」を「2」にします。

「ページの順序」を「横（右から左）」に指定します。

「ページ境界線を印刷」にはお好みでチェックを入れてください。

※プリンターのプロパティで逆順印刷を指定し、最終ページから印刷することをお勧めします。（各プリンターの説明書をご確認ください）

表紙（1ページ）を印刷するときは、表紙を表示させた状態で「印刷」のウインドウを開き、「印刷するページ」で「現在のページ」を選択します。

媒体の形式に関わらず、第三者への譲渡・配布、購入者本人の個人的バックアップ目的以外でのコピー、内容・体裁の改変、常識の範疇を超える長さ及び作品名と著者名無記載での文章の引用・抽出、これら全てを禁止します。

夏の翼



SASURAI 文学

井上勝夫





麝香色しやくかうの夜明けが近づいてくる

遙かな東の空から

私はあなたを捜して一人

長い旅に出た

生まれる前から知っている人

迷い女まよめより求めている人

地平は今輝きを増して

薄れゆく銀河の中で

月が微妙に色を変える

この瞬間

永遠に止まったかのような時間

私は感じる あなたの生命の波動を

光た 私の進むべき道

永遠の理想であるあなたと、1990年代の北海道に



夏の  
翼

目次

夏の翼

落花流水編 らっかりゆうすい

……

9

初章

未明の出会い

……

11

第二章

三人のお化けば

……

30

第三章

流れる雲の下で

……

59

第四章

花咲く原野の中で

……

85

第五章

旅人たちの歌

……

100

第六章

憧れの季節

……

129

第七章

鳥沼の思い出

……

154

第八章

祭りの日

……

184

夏の翼

天衣無縫編

……

217

第九章

素敵な水遊び

……

219

第十章

洞窟探検

……

245

第十一章

人魚伝説

……

310

第十二章

比呂美の島物語

……

383

第十三章

雨のテントで

……

429

夏の翼

一期一会編

……

469

第十四章

小さな島の二人

……

471

第十五章

ジプシーの夜

……

497

第十六章

海と優里

……

541

第十七章

川旅

……

571

第十八章

旅人たち

……

593

第十九章

海へ

……

645

第二十章

雨宿り

……

666

第二十一章

決心

……

694

夏の翼  
相思相愛そうし そうあい編

……

721

第二十二章	それぞれの一人旅	……	723
第二十三章	二つの再会	……	765
第二十四章	星空の下の自由	……	816
第二十五章	銀河の盃 <small>さかずき</small>	……	860
第二十六章	優里の夢	……	923
第二十七章	夏の終わり	……	947
最終章	愛の夜明け	……	996

表紙・カバー・帯／写真・装丁

題字 堀美幸

井上勝夫

夏<sup>な</sup><sub>つ</sub>

の

翼<sup>つ</sup><sub>ば</sub><sub>た</sub>

物語の時代設定は1990年代半ばです

夏<sup>なつ</sup>

の

翼<sup>つばさ</sup>

〈一〉

落花流水<sup>らっかりゅうすい</sup>

編



## 初章 未明の出会い

凜とした水面の上には、朝霧が立ち始めていた。少しずつ、夜明けが近づいてきている。

羽村海は、この未明の静寂を壊さないように、できるだけそっとパドルで水を掻いていった。彼の乗る青い二人乗りカヤックは、ほとんど波を作ることなく、ゆつくりと、しかし小気味よく水上を進んだ。

岸には白く枯れて風化した木が無数に立っていて、それがこの入江の光景を特別に幻想的なものになっている。湿原性の地面からも、霧がゆらゆらと昇り、立ち枯れた木々が動いているかのような錯覚を起こさせる。

海はいつたん、パドルを漕ぐ手を止めた。わずかの間、カヌーの水を切る微かな音が聞こえていたが、それが止むと、世界は完璧な無音になった。

海は静かな充実感に浸った。二十二歳の夏から数えて、北海道を旅するのは七度目だ。この道東の野付半島に来たのは、これが三度目である。だけどこんなに不思議で美しい場所があるとは、今まで全く知らなかった。想像さえしていなかった。

野付半島は、海中に堆積した砂でできた半島である。海抜わずか数メートルの、異常に細長い陸地に、直線的な道路がただ一本だけ走っている。左右を海に挟まれた雰囲気のある道路が終点を迎えると、草原の中へと遊歩道が伸びていく。草原が湿原に変わると、荒涼とした光景が現れる。海水に浸蝕されて枯れた森。トドワラと呼ばれるその場所を、海はけっこう気に入っていた。

しかし彼が今いる入江は、観光地となっているトドワラなど問題にならない魅力を持っていた。立

ち枯れた木の数は圧倒的にこちらのほうが多いし、入江の奥に隠されたもう一つの入江、といった感じのここには、人の気配すらない。

《誰もやってこない、秘密の入江》

海はそんな言葉を心に浮かべて、その響きに酔った。

正確に言えば、誰もやってこないことはない。かなりの枯木が間引きされたように根元近くで切り倒されて、運び去られている。このあたりの漁師たちは冬場の燃料を薪に頼っていると言うから、保護区域に指定される以前、ここはうってつけの燃料確保の場所だったのだろう。

もちろん今は、滅多に人がやってこない場所であることは確かだ。昨日の夕方近く、カヤックの持ち主である比呂美と一緒に岸辺を散歩したときには、人間の足跡を見つけることはできなかつたし、木が切り倒されたのもずいぶん以前であることが、その切り口から分かる。

《今は誰もいない、不思議の世界》

海はまたそんな言葉を思い浮かべて満足した。

浸蝕、という言葉が、これほど実感できる場所も珍しい。満潮の今、海面とほぼ変わらない高さの岸は、もうほんの数センチ潮が満ちてくれば、完全に水没してしまうような陸地でしかない。三十年ほど前の地震で地盤沈下を起こしてからというもの、この野付半島は現在も沈み続けている。消滅への途をたどっているのだ。虚ろに立ち尽くす白骨に似た枯木たちは、その奥に広がる森の運命を物語っている。だが自然の摂理であるがゆえに、そこには美しさがあつた。

《——滅びゆく森》

こんな素敵な場所を発見できたのは、半分以上は比呂美のおかげだと思つた。見つけたのは海だったが、比呂美が野付半島にカヌーで行こうと誘ってくれなかつたら、絶対に発見できなかった場所だ。その比呂美はテントの中で、まだ寝ている。この夜明け前の神秘的な静寂を教えずに、一人彼だけ

寝させているのは、ちよつと罪だろうかと海は思った。

振り返つて、テントの方向を見た。岸辺近くに張つた緑色のドーム型テントが、霧の中にうつすらと見えている。引き返すのは簡単だ。ついでに服を出して、重ね着をしようかと考えた。真夏でさえ、道東では寒い日が珍しくない。前二日は七月上旬としては暖かい気温だったが、明け方の今は、Ｔシャツの上オートバイ用のライディングジャケットだけでは、体が震えてくるくらいだった。

けれどもこの肌寒さが気持ち良いように思える。こんな世界に一人きり自分だけというのも全然悪くない。舷側から右腕を伸ばして、自分を浮かべている水に指先を入れてみた。

ひやり、と冷たい感触に、思わず笑顔になった。波紋を作つた焦げ茶色の水面には、ネイビーブルーの上着の袖が、ぼんやりと映っている。上体を傾けて水中を覗き込んだが、水深は分からなかった。顔を正面に戻して、目の前に広がる景色を見た。

水面上に低く漂う霧が濃くなっていた。しかし東の森の空は白く明るく輝き、薄紫色の夜を溶かし始めている。海はパドルを手に取り、夜明けの光に向かって漕ぎ出そうとした。

その時、遠くから人の声が聞こえてきた気がした。  
耳を澄ます。

少しの間、何も聞こえなかった。だが再びまた、声は途切れ途切れに聞こえてきた。霧に包まれている向こう岸からだ。女性の声だ。

怪訝に思った。こんな時間に、この誰もいないはずの場所に、女性の声がする。

海は慎重に、音を立てないように水を掻き始めた。霧で岸がはつきり見えないのと同様に、相手からも水面上の自分が見えないはずである。気づかれずにそつと近づいて様子を見てみようと思う気持ちで、にわかに胸が高鳴った。

海が乗っているカヤックの全長は六メートル近い。これは二人乗りのカヌーでもかなり大きいほう

だ。前後に分かれて二つある操縦席のうちの、後ろ側に座っている海からは、舳先がわずかに霞んで見えた。霧が一段と濃くなり、手前の水面まで消そうとしている。

だが漕ぎ進むにしたがって、相手の声は途切れずに聞こえるようになってきた。そして海は気づいた。

《歌を歌っている！》

いっそう慎重にパドルを操る。相手が自分の気配に気づいて歌をやめてしまわないように、細心の注意をはらう。パドル先端のブレードを水から抜くときにも、水に入れるときにも、飛沫が上がる角度を作つてはいけない。

相手が声を大きくしたためか、顔をこちらに向けて歌い出したためか、対岸まではまだ数十メートル離れているはずなのに、急にはつきりと声が聞こえ始めた。

水面を伝わってくるその歌は、海が聴いたことのない曲だった。

それは不思議な旋律だった。甘く、切なく、なのに同時に力強く、荘厳な響きがあつて。歌っている女性の声は、とても澄んだ綺麗な歌声をしている。

海は早く相手に近づきたくて、しかし音を立てないように漕がなければならず、じれったくなつてきてしまった。

《こんなにドキドキする出会いがあるなんて！》

この期待に見合うだけの美人なら、どんなにうれいだろうと思う。心臓が鼓動を強くして、カヤックの速度を上げさせようとする。パドルを操る腕も意思には従わず、対岸への距離を少しでも早く縮めようと力を強めていく。カヤックの鋭い舳先は霧を切り裂いて水面を滑り続けた。

やがて、うつすらと対岸の水際の様子が見えて、枯木の脇で横向きに立っている女性のシルエットが浮かんだ。霧は風もないのに薄くなつたり濃くなつたりして、女性を見せたり隠したりし始めた。

海は恍惚としてしまった。靄の向こうに見える姿は、まるつきり自分の理想の女性そのものに感じられたからだ。たとえそれがこの雰囲気の作り出した錯覚であったとしても、海はその束の間の幻想を大いに楽しんだ。

女性がいるのは、岸が小さな岬状に突き出た場所だった。五本ほどの枯木が、幹や枝をくねらせて踊っている。中心には、ねじれて裂かれたように折れた大木があり、女性はその幹に軽く背をつけて立っていた。

海は進路をやや右方に変えて、彼女が体を向けている正面へと回っていった。

岸辺の風景に、次第に色彩が生まれていく。墨絵のようだった背景の森は深緑に変わり、夜明けの空は麝香色に染まった。湿った土の地面は褐色に、水際の草は緑に息づいた。密集して立ち尽くしている枯木たちだけが、相変わらず虚ろな白さを保ったままである。

けれども海の目に、風景は単に映っているだけのものではなかった。焦点は一漕ぎごとに明瞭になつていく女性の姿だけに集中している。

緩やかな波を持った黒い髪。高めの身長。すらりと伸びた長い脚。チェック柄の厚手のコットンシャツに、ジーンズという服装——。

何か物語を秘めていそうな奇妙な大木とともに、薄い靄に体を包まれた彼女の存在が、海には現実離れしたもののよう感じられた。

瞬きもせずに女性を見つめ続けた。女性のほうは気づいていないのか、目を閉じて歌い続けている。綺麗な顔立ちをしていた。微笑をたたえて歌う表情は優しげで、でも芯の強そうな、凛とした印象もある。どことなく、ここで気軽に声を掛けるのがためらわれる気品も感じられる。

海は漕ぐのをやめて、進むのを惰性に任せた。カヤックはゆるゆると速度を落としながら岸边に近づき、左手の岸辺と舷側とを並行にして止まった。

今や二人の距離は、互いの息遣いさえも分かるほどだった。海がパドルを置くのと同時に、歌が静かに終わり、女性が目を開けた。落ち着いた眼差しでまっすぐに海を見つめ、それから少し照れたような、遠慮したような笑顔を浮かべた。

その笑顔で、海はすっかりうれしくなってしまった。なんて綺麗な女性だろうと思った。

「やあ、君は、人間かい？」

「尋ねながら、女性に微笑みかけた。」

「さあ？ 一応、人間の姿はしているはずだけど」

女性は一瞬いたずらっぽく海を見つめて、すぐに今度は素直な笑顔を見せた。途端に華やかな可愛らしさが現れて、思わず海はどきりとしてしまった。

「歌声で船乗りを誘う、人魚がいるって話を聞いたことがあるよ」

わざと大袈裟な視線で、女性の脚を見つめた。

「ちゃんとした脚よ」

女性がジーパンの裾をちらりと引き上げて、右の足首あたりを見せる。そうしておかしそうに、軽く声を出して笑った。

海は照れた表情になって女性の顔に視線を戻し、初めに言おうと思っていたことを口に出した。

「綺麗な、歌だね」

「ずっと聴いてた？」

女性が頬を赤くする。

「誘われてやってきたんだよ」

海はパドルを手に取り、自分の漕いできたほうをブレードで示した。そのついでに水を一掻きして、カヤックを横向きのまま、水底に軽く乗り上げさせた。

「あれはね、私の好きな歌なの。こんな薄紫色の夜明けに、恋人を待つ少女の歌なのよ」

女性は微笑んで、枯木にもたれた姿勢のまま、両手を頭の後ろに組んだ。空に視線を移して、静かな満足そうな表情をして言った。

「もうすぐ、朝日が差すわ」

海は顔を右側に向けて、東の空を見上げた。湿原の奥の低い森の向こうでは、もう太陽が水平線から出ているのかもしれない。なかつた。

顔を左に戻し、再び女性を見た。女性が首をかしげて、同意を求めようとする仕種をする。それは素敵に優しい雰囲気を表わしていた。

《不思議な感じの娘だな》

とてもこの女性が気に入った。こんな女性と一緒に、この夜明けを迎えようとしていることが、なんだかとんでもない幸せに感じられた。

「それじゃあ水の上から、夜明けを見てみない？ それでまた君の歌を、聴かせてほしいんだけど……」

できるだけさりげなく誘ってみたつもりだった。実は海はかなり緊張して言ったのだ。たったこれだけの会話を交わしただけの相手のカヌーに、女性が素直に乗ってくれるとはあまり思えなかったし、彼女が自分の出現によって、良い気分の朝を台無しにされたと内心思ったりしているのではないかと考えたからだ。それでもこの女性がカヌーに乗ってくれたら、自分はどんなにうれいだろうと思つた。

考える様子を見せた後で、女性は答えた。

「あなたの目の前で歌うのは恥ずかしいけど、カヌーには乗ってみたいな」

それを聞いて、海は自分があまりにも正直に、うれしそうな顔をしてしまったことに気づいた。少

し気まずく感じたが、意外にも女性も応えるように大きな笑顔を見せると、枯木から体を離して近づいてきた。

海はコックピットから抜け出て、カヤックの左舷側に立ち上がった。砂混じりの泥底の水中に足を突つ込むことになるが、水陸両用にスポーツサンダルを履いている。

「私は裸足になったほうがいいみたいね？」

水の中に足首まで漬かっている海を見て、女性は岸辺にしゃがんで、靴の紐を解き始めた。しっかりした革製のトレッキングシューズである。あたりを見回してみると、湿原と森の間の草地に、ベージュ色のテントが張ってあった。

「あれが君の家？」

冗談で言った質問に、女性は片足でバランスを取って立ち、靴下を脱ぎながら、いたずらっぽい顔を見せてきた。

「そう。昨日引越してきたの」

「じゃあ、ちよつと離れてるけど、お隣さんってことだね。改めて、よろしく。でも昨日ここに来たときは、全然気づかなかったよ」

「私は向こう岸に、誰かがテントを張っていることだけは知っていたわよ。夕方ここに着いたとき、ほんやり光っているテントが見えたから」

女性はジーパンの裾を折り、膝まで巻くり上げると、軽くうなずいて出発の準備ができたことを伝えてきた。

「では、お嬢さん、行きましようか」

海はおどけた感じに機嫌よく言って、カヤックを水深のあるほうへと少し押し出した。

「靴、どうしよう。潮はこれからまだ満ちてくるのかなあ？」

靴を手に持って、女性が尋ねてくる。今いる場所の地面は水面とほとんど高さが変わらないため、潮がさらに満ちてくれば水没してしまうのだ。

「乗せていけばいいよ」

カヤックを示して答えると、女性にはっこりとうなずいて水の中に歩き、前側のコックピットの横に立った。水は冷たいはずだったが、気にする様子は見られない。むしろ裸足で水に漬かることが楽しいといった表情さえ浮かべている。

そんな女性を、海は好印象を持って見た。脚に目をやると、雫に濡れたふくらはぎが素晴らしく綺麗に見えて、海は一瞬、妙に緊張してしまった。

「いいよ」

海がカヤックを押さえて言うと、女性はくるりとカヤックに背を向けてから、片手をコックピットの縁に添えて、ふわりと座席に腰を落とした。次いで足先を水中で軽く動かして泥を洗い落としてから、両脚を上げて体を回し、コックピットの中に脚を滑り込ませた。

海は口の中で小さく声を上げた。感心したのだ。女性がカヤックに乗り込む動作はまったく滑らかで、流れるような美しさがあった。

「カヤックには乗ったことがあるの？」

いきなり船体に足を踏み入れて乗り込まなかっただけでなく、丁寧に足の泥を落として乗ったことにも感心していた。骨組に船体布を被せた構造の折畳式カヤックは、一般のボートなどに比べてかなり繊細である。浮いている状態で船底に立ったり、泥や砂を船体内に入れる行為は、船体を傷める危険性があるのだ。

「んーん。初めて。だからとてもわくわくするわ」

「でも、ずいぶん正しい乗り方ができる」

言いながら、海かみも女性と同じやり方でカヤックに乗り込んだ。乗り込みながら、この乗り方を滑らかにできるには、バランス感覚と筋力と体の柔らかさが必要であることを、改めて認識し直した。

「じゃあ、出艇するよ」

パドルで水底を一回突き、水際からカヤックを離す。ふわり、とカヤックが水に浮かぶ感覚が起くる。ゆつくりと転回させて、船先をやって来たほうに戻す。入江の中心に向かって漕ぎ始めると、カヤックは滑るように水面を進み出した。

「うわー、すごく気持ちいい！」

女性が振り返って笑顔を見せる。海かみも微笑み返し、とてもいい気分になった。しばらく進んでから、進路を左手の岸に向けた。

パドルから伝わってくる水の抵抗は、先程よりも、女性を乗せた分だけ強くなっている。もちろんそれはうれしい感覚だった。女性が自分のカヤックに乗っている事実を、海かみは水の抵抗から確信することができた。

《幻まぼろしや、お化けおばけじゃないぞ》

ちよつと冗談冗談ぼく思う。女性は指先で水面を撫なでて、カヤックの速度を確かめているような様子を見せている。

「君の分のパドルも、あれば良かったな」

声を掛けると、女性は振り向いて笑った。

「漕こぎ方知らないわ」

「簡単だよ。あんなに見事に乗り込むことのほうが、ずっと難しいんだから」

海かみは煽おだてる感じで言ってみた。

「そお？ あなたが降りたときの、逆のやり方をしてみただけだけど。それに、乗り方くらいなら、

なんとなく分かるじゃない？ 少しでも興味があったし。——でも私が分かんないのは、カヌーとカヤックで、何が違うかってこと」

肩をすくめて、困った顔を見せてくる。

《面白い娘だな》

海はこんなふうに素敵に表情を変化させる女性のことを、本当に魅力的に思った。それに女性がカヤックという言葉を知っていて、興味があると言ったこともうれしかった。

「カヤックはカヌーだけど、カヌーは必ずしもカヤックじゃないんだ」

女性が首をかしげてくる。海は笑って、漕ぐ手を止めて説明をした。

「簡単な見分け方を言うとね、カヤックはこれみたいに、乗り込むところが穴状になっているものこと。別の言い方をすると、コックピット以外の場所が、布やプラスチックの船体で覆われている形状のもの」

右手をパドルから放して、コックピット周りの布製デッキを撫でてみせる。

「つまり、クローズド・デッキのカヌーを、カヤックって言うんだ。一般的にはね。もうちょっと詳しく言うと、カヤックはこんなふうに、水を掻くブレードが一本の棒の左右両方にある、ダブルパドルで漕ぐものなんだけど、カヌーはシングルパドルって言って、このパドルを真ん中から切ったみたいな、ブレードが片側にしかないパドルで、膝立ちの姿勢で漕ぐものなんだ」

「んー、違いはよく分かったけど、カヤックはカヌーで、カヌーはカヤックじゃないってのは？」

女性が海の初めの言葉に戻って訊いてくる。

「はは。そうだったね。日本じゃどちらのことも総称してカヌーって呼ぶことがあるけど、カヌーのことをカヤックとは呼ばないんだ。もともとカヤックは極北の狩猟民族が使っていた船が起源で、カヌーは主にアメリカインディアンや、南太平洋の島の民族が使っていた船が起源だから、別の乗り物

なんだけどね。手漕ぎで前に向かって進んでいく小船ってことでは似ているし、カヌーって言葉でまとめみたってことなのかな？」

結局、海は自分の知識を全て使って説明した。実は海自身も呼び方には特にこだわっていない。

女性は納得した様子で微笑むと、正面に向き直り、あたりの風景をゆっくりと見渡し始めた。海も再び漕ぎ始めて、自分たちを取り巻く風景に目を移した。

霧の中から突き出た無数の枯木の先端は、朝日に金色に照らされていた。空は色を次第に濃くして、世界を目覚めさせる準備をしている。

「霧がなくなっていくみたい」

東の低い森の奥に、太陽の光が見える。女性が言った通り、霧は急速に薄くなっていき始めた。そしてとうとう、朝日が水面を照らした。

水の色が一変した。

不透明な濃げ茶色から、透明感のある、深い瑠璃色に変わったのである。霧は瞬く間に消え失せてしまった。

「すごく不思議な色」

水の底を覗き込もうとする女性の目が、水の色を映して瑠璃色に見えた。水面の照り返しが頬を染め、瞳には生命そのもののような光が輝いた。

海は思わず感嘆の溜め息を漏らすところだった。女性の美しさは完璧なものに思えた。肩胛骨の中心までの長さの髪は緩やかな波を作って、朝日に金黒色に輝いている。自分はこんな女性と出会うことを、ずっと待ち望んでいたのではないかと思つた。

女性は海がそんなふうに見惚れていることには全然気づいていない様子で、今度は朝日の照らし出す側に顔を向けた。そうしてなんともうれしそうな表情を浮かべた。

「見て」

促されて、海は自分たちの右側の風景を見てみた。岸辺の風景が、水面にそっくり逆さまに映し出されている。波は全くなく、瑠璃色の鏡となった水面には、世界がより鮮烈な色調をもって広がっていた。

海は漕ぐ手を止めた。光と、水と、風景と、目の前にいるこの女性とが、自分の世界に魔法を掛けてしまったのではないかと思えた。

「ねえ」

囁くように、そっと女性が言った。

「ここには、幻想があるのね」

穏やかな口調だったが、深く感動していることが伝わってくる。彼女も自分と同じ気持ちでこの光景を見つめているのだと思うと、海はなんとも充実した気持ちを抱くことができた。

「北海道は、旅人たちの聖地だよ」

海の言葉に、女性は輝く目をして笑顔を見せた。

「あの岸辺に着けて」

女性が舳先の向いている岸を指さす。枯木はそのあたりが一番多く立っていた。枝は朽ちて落ちてしまったのか、少し曲がった巨大な針のように、幹だけになって立っている木も多い。

海はパドルを手に取り、勢い良くカヤックを進めた。朝の冷たい空気が頬に当たり、自然と笑みが浮かぶ。コックピットの奥に伸ばしている脚には、船底布を通して、水の心地よい流れが感じられる。カヤックが作る風に揺れる女性の髪からは、まるで甘やかな香りが運ばれてくるかのようだ。

すぐにカヤックは岸辺に着き、女性は海の場合で水辺に立ち上がった。

続いて海もカヤックを降りる。船体を水際に押し上げて、湿原の光景を眺めてみた。

岸辺には、いくつもの水溜りができていた。正しく言えば、複雑に入り組んだ潮溜りである。青色を増した空と、そこに伸び上がっていく枯木とを、見事に逆さまに映し出している。水中を覗き込むと、背の低い草が水没している様子が見えた。海水に漬かっても生き生きしているということは、耐塩性のある種類なのだろう。

「ちよつと散歩してみない？」

女性が海を誘って、裸足のまま湿原の中に歩き出す。

海は数隣考えてから、自分もサンダルを脱いで裸足になった。わずかに沈み込む草や地面の冷たい感触が、新鮮な刺激となつて気持ちいい。女性に追いついて、並んで歩いた。

「裸足で柔らかな地面を歩くのって、いい感じね。でもこういう湿原性の地面を踏むっていうの、自然破壊かしら？」

考える難しい顔を作つて、女性が言う。そのくせ足取りはずいぶん楽しそうだ。いたわるようにして草や地面を踏んでいるのが分かるが、繰り出すステップは軽やかで、そこには迷いなど少しもなかった。

「自然破壊っていうのは、無知な人間によつて、もつと大規模に行なわれるものだよ。人が歩く行為が自然破壊だったら、原始人のほうが、現代人よりもいっぱい自然破壊をしていることになるよ」

真面目な顔で答えた海に、女性はにこりと笑つた。

「面白い意見だけど、その通りね。少なくとも、ここの枯木を半分くらいも切り倒しちゃつた誰かよりも、この風景を素直に楽しんでる私たちのほうが、全然罪がないわね」

女性は足を止めて、周囲を見渡してからうなずき、また歩き始めた。

岸辺から離れると、地面は湿原性の草地になった。一見すると、緑鮮やかな草原だ。そこらじゅうから枯木や切り株が突き出ている。天を突き刺す枯木たちには、あつけらかなとした美しさがあった。

霧の中で見たおどろおどろしい雰囲気も虚ろな表情も消えて、枯木たちは、切り株でさえ、ただ淡々と自己の存在を主張していた。

「枯木にも、魂が残つてると思う？」

女性が尋ねてくる。芸術的に曲がりくねった木を見つけて、その風化した肌を触りながら、興味深げに眺めている。

同じことを考えていたよ、と答えようとして、なんだか気障っぽいのでやめた。海が何も言わなくても、女性は満足した表情を見せて、先に歩を進めた。

《不思議の世界の、不思議な女》

朝日に斜めに照らし出された風景は全てが金色っぽく輝き、逆に影は一層深く落ち着いて、信じられないほど強烈な明暗を作り上げている。自分たちの歩く微かな音以外は何も聞こえてこない森と湿地は、原始の時代の空気をそのまま残しているような、時間の観念を超越した空間として広がっている。

草の中を裸足で軽やかに歩いていく女性の後ろ姿は、そんな風景と完璧に調和していた。まるで現実感のない、あるいは超現実的な風景の中に、全く違和感なく溶け込んでいるこの女性はいったい何者なのだろうと、海は真剣な疑問を感じた。

「君はオートバイで旅をしているんだろ？」

後ろから唐突に質問してみた。そう思ったのは、女性の靴の左足側に、シフトチェンジ用のパッドがつけてあったのを思い出したからだ。

「あなたもそうでしょ？」

歩きながら振り向いて、自信を持った口調で女性が返してくる。

「旅先でカヌーに乗ってる旅のライダーって、いると思う？」

海はわざと意地悪い表情で訊いてみた。

「うーん、あなたがどうやってカヤックとキャンプ道具を一緒に運んでいるのかは分かんない。カヤックって、畳んでもかなり大きくなるんだものね。特にあんな大きな二人乗りのだったら、なおさらよね。だけど、あなたの着てるの、オートバイのジャケットでしょ。そういうのを着てカヌーに乗ってる人って、バイク乗り以外に考えられないでしょ？」

答えて、女性も同じように意地悪い顔を作ってきた。その顔がまた、海は気に入った。鼻に皺を寄せた様子が、なんとも可愛いのだ。

「なかなか鋭いね」

「誰だってそう思うわ。それにね、あなたには、旅人の匂いがある」

女性は立ち止まって、なんとなく真剣な眼差しで海を見つめてきた。

「昨日も一昨日も、風呂に入っていないからね」

気まずそうな顔を作って腕の匂いを嗅いだ海を見て、女性は声を出して笑った。

「今ね、あなたは海の香りがする」

そう言って、女性はなぜだか満足そうな表情を見せた。

海は照れてしまい、照れ隠しのような返事をした。

「二日間この海を漕いでいたからね。ところで君は、どうしてこの場所が分かったの？」

「ん？ 私があそこにテントを張っていたこと？」

海がうなずくと、女性は親しげな笑顔を浮かべた。それまでとは少し違う、すっかり打ち解けた雰囲気的笑顔だった。

「この森の道路側って、いい景色でしょ？ いっぱい枯木が立ってたりして。私ね、いい景色のところでは絶対にバイクを止めるの。そうして歩ける場所なら歩いてみるの。それで道路に平行に川みた

いに伸びてる、細い浅い潮の入り込みのところを渡って見たのよ。靴を脱いでね。引潮だったから、膝下までしか水深がなかったから。でもさすがに他の人が車を止めて眺めてたりする湿原のほうには行けなかったから、森の縁をたどって海のほうにどんどん歩いていったのね。けっこう歩いてから、左手の森が薄くなつたところで、藪の中に入ってみて、奥の様子を覗いてみたの。すると森の切れ間から、ここがちらつとだけ見えたのよ。よし、あそこまで行こう！ って思ってたね、バイクのところに戻り返して、食料の買い出しをして、トレッキングに必要な道具をまとめて、さあ行こうって思ったら、今度は満ち潮になっちゃってて、渡れないのよ。仕方ないからまた潮が引くまでトドワラ散歩で時間を潰したんだけど、結局潮が引かなくて。あはは。でもそのころにはもう誰もいない時間になつてたから、森の中を歩いて、もう一度やつて来たってわけ」

「…すごい根性だね」

女性の思わぬ長い返答に、海はつくづく感心した調子でぼつりと言った。女性はまた声を出して笑った。

「で、あそこにテントを張ったときには、すっかり日が暮れてたってわけなの」  
女性はおどけたように肩をすくめてみせて、今度は海が声を出して笑った。

「でもね、おかげで、いい朝を迎えられたわ。ありがとう」

優しく見つめられて、海はドキドキしてしまった。

「こちらこそ、ありがとう」

顔を赤くして応えた海に、女性は笑顔を見せながら首をかしげた。

君がカヤックに乗ってくれたことだよ、と心の中で言いながら、海は別の言葉を口に出した。

「もうちょっと、歩こうよ」

この女性と一緒に過ごす時間が、少しでも長くあってほしいと思う。その気持ちの、精一杯の表現

だった。女性は素直にうなずいてくれた。

二人は湿原の奥の森の縁まで行き、湿原を時計回りに大きく円を描くように歩いて、再びカヤックの上へある岸辺に戻った。

ふと、海は地面に転がっているものに目が行き、その場に足を止めて屈んだ。

「こんなのがいたよ」

言いながら海は、草の中から白い球形の物体を拾い上げた。

「ほら」

女性に差し出して見せた。大型犬のものほどの、頭蓋骨だった。肉食動物系の鋭い歯を持つており、特に上下の犬歯は、三センチほど長さのある鋭い牙となっている。

「すごい歯。何の骨かしら？」

気味悪がる様子もなく、女性は頭蓋骨を手にとつて観察し始めた。

「犬じゃないよね。熊でもないみたい。分かる？」

答を仰ぐ感じで見ている。海は笑顔で答えた。

「それはアザラシの骨だよ」

「アザラシがいるの？」

女性が驚いた顔をする。

「昨日、海でいっぱい見たよ」

「ふうん」

女性は満足した表情をして、森の奥の、見えない沖のほうに目をやった。

「さて、そいつも乗せてやるか。やっぱり漕ぎ手にはならないけど」

カヤックを水辺に押し出して、海はパドルを手に取った。

「私もまた乗せてくれる？」

アザラシの骨を大切そうに抱いた女性が、心配気な顔をして尋ねてくる。それがとても可愛らしく見えたので、海はつい笑い声を上げてしまった。

「歩いて帰れなんて、言わないよ。さあ」

前方のコックピットを勧められて、女性は明るい表情を見せ、前回と同じくまた見事に乗り込んだ。海もコックピットに入り、パドルで岸辺を突くと、カヤックはふわりと水に浮いた。

舳先を入江の中心に向ける。

「君は変わった娘だね」

漕ぎ出しながら、海は機嫌よく言った。

「そうかしら？」

女性は振り返って不思議そうに海を見つめ、ふふ、と優しく笑った。それから正面を向くと、静かに歌を歌い始めた。